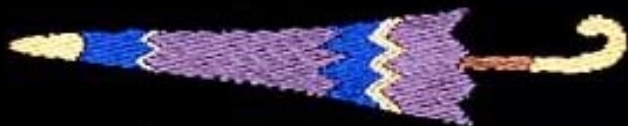


昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可  
平成十九年六月一日発行  
通巻九九四号（毎月一回一日発行）

# 京鹿子



6月号



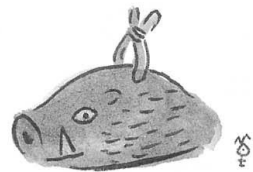
# 蛇穴を 丸山佳子

樹に岩に仏心ありて地虫出づ

ゆく春や所かまはず絵文字ふえ

かたまつて赤の相談チユーリップ

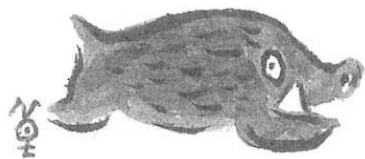
嵯峨に来てまだ巢作りの気配なし

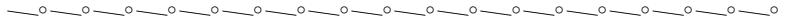




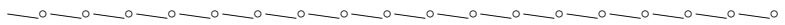
豊 田 都 峰  
清響集 その七十四

さくら貝ひろひしよりのとほさかな  
さくら貝白き詩集の序となさむ  
一声のあとにはなきまま宮おぼろ  
播州の山まろまろと花うたげ  
播州は玉晴として花山河  
春月のきざはしとなる棚田村





さきがけの山吹は神の手触れとも  
頂の磐座よりの芽木なだれ  
神鈴は天の囀りとも降り  
川風や椿寿忌につぐ啄木忌  
啄木忌北にかたむく雲の肩  
花しだれしだれてあまりばかりなる  
花散らしいま遠国へ発ちゆけり  
花ふぶきあびたちまちに遠ざかる



## 秀華採集

藁焼きて水奔らする常世まで

森 朧明

藁を焼くと髓まで深紅となる。まさしく完全燃焼の感がある。まわりの水はそれに合わせるごとく奔る。完全に煮えたとぎるとみてよい。それを「常世まで」とするところに、生活の原点である火・水への作者の深い思索がある。

雛かざり仕丁の足の細かりき

井 潟 ミヨ

雪晴れへ肘あげて打つ齋の鉦

武 藤 ともお

ともに焦点的なものの発見を評価したい。「細かりし」「肘あげて」と確認する描写は強い。

鈴鹿 仁

豆の飯

さくらさくら一意もつ貌つづきをり  
木履の音やはらかくさくら坂  
花冷えの妓が前をゆく水あかり  
虚も実も身に添ふかたち松の芯  
薄暑来て風の思はく問ふてみる  
緑立つ天へ身構ふ綺羅となり  
末つ子に母の溺るる豆の飯

近 詠

宇都宮滴水

寄居虫

四月馬鹿今日がきのふになる刹那  
おぼろ月天の渚を独り占む  
ばらの名をなぞり指先重くなる  
寄居虫や波の隙間をのぞきぬる  
おぼろ浜次の一步も濡れにゆく  
さくら貝陽のなき刻も匂ひけり  
なにもかも臍のなかにゐて円し

神麓集



朱子学で大義名分風光る  
海防の意見書出して春嵐  
極貧の雲濱邸址春の雲  
一生を尊王攘夷に山笑ふ  
先立ちし妻と長男彼岸入り

林 日圓

春や春 丸山冬鳳

春や春句碑にちんまり侍史の句碑  
露座立像合掌の手に雪霰  
春禽の杉は木立の聖さま  
あでやかな禽声雑木谷の春  
背戸の尾根木木の声なき風光る

伊豆大島 北村 香朗

大島や樹齡四百てふ椿  
舞台彩る椿まつりのあんこ哉  
春北風や稜線長く三原山  
明日菜の天婦羅もよし島の昼  
大島の土産に為朝百合の球

さざなみに影走らせて芦芽ぐむ  
ややありて崩る紙舟水温む  
夕の風雛の灯ゆらしなまめけり  
取り皿は益子がよけれ木の芽和え  
暖かや小石一つに波生まれ

藤岡 紫水

水鏡 竹貫 示虹

鳥とんであとに跡なし今年竹  
鉛筆をけずれば匂ふ梅雨の月  
栗の花匂ふふるさと好き嫌ひ  
麦秋のどこが燃えても可笑しくない  
睡蓮のひとりつつしむ水鏡

川崎 光一郎

三月の学帽振りし別れかな  
吟行や風のささやく梅日和  
天へ枝地に花翳や梅の園  
雨上がり畦のつくしが頭出す  
雑木山関あげるかに芽吹きたり



神麓集



蓮如忌といへば「白骨の御文章」  
母の遺せし水晶の数珠蓮如の忌  
御仏飯大盛りにして蓮如の忌  
氷山のどんどん溶けて地球病む  
流水原エゾ鹿の群点点と

丹生をだまき

吊皮がだまつて揺れる紀元節  
三と四は睡き数なり涅槃西風  
又ねとは死別の言葉涅槃西風  
野を焼いてみんなドラマにしてしまふ  
正しさの非情通せば雪になる

松田 都青

名にし負ふ幸は花神の掌にゆだね  
神佛のあまた坐す郷奈良の幸  
春近し塀の煤けも模糊として  
冬の芽の幸をゆだてし神の御掌  
大極殿未建の北風は吹き抜けて

奥村 鷹尾

旧曆の雛飾り継ぐ拓地人  
芽木囲む墓群の始祖は釈童子  
幼霊の墓畔の土筆摘み残す  
鯉跳ねて鴨の帰りを促せり  
拓地沼目高いとしみ鍬洗ふ

拓村 禰寝 瓶史

春耕す水平線を崩しつつ  
公開の秘佛拝みに蝶も来る  
梅香り車椅子まで弾みけり  
流るるに同じ雲なし蝶遊ぶ  
同じ事亦も笑はれ日脚のぶ

吉田 多美

風濤にひと冬まがきぐらしかな  
籬村入口ひとつ冬怒濤  
冬怒濤貸し借りぐらし籬村  
籬して風待つ里の冬ごもり  
奥能登の行きどまりなる波の花

籬の里 和田 照海



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

あかときの夢のかけらのうすごほり

枚方 森 菜明

葦焼きて水奔らする常世まで

勢揃ひなら朝市の冬野菜

武藤ともお

風と来てうつつの隙を抜ける蝶

雪晴れへ肘あげて打つ齋の鉦  
合掌の木組み噛み合ふ春一番

追ひかけて来しが海市に紛れ入る

利かん気の手応へぢかにいかのぼり  
草餅が来て押しくらの中休み

芽柳のなびくと見せて廓あと

京都 井瀉 ミヨ

さま 神田 惣介

如月や絵馬に囲まる正一位

寒の入り今朝の鏡に古稀の顔  
白き息小石けり蹴りランドセル

雛かざり仕丁の足の細かりき

年賀状碧眼の児は友の孫

地虫出づ見上ぐる城の安堵かな

六角堂へそ石斜めに初時雨

をしどりや娑婆気抜けたる顔を出し  
春へ翔ぶめがねのフレームとりかへて

湯の宿や雪見酒なる婚記念